

厭世詩家と女性

——映画文学人生論

北村透谷（1868-11894）

『厭世詩家と女性』（1892）「女学雑誌」

『楚囚の詩』（1889）『蓬莱曲』

『人生に相渉るとは何の謂ぞ』（1893）「文学界」

『内部生命論』（1893）「文学界」

恋愛は人世の秘鑰（ひやく）なり

北村透谷の新体詩「眠れる蝶」とめぐりあい、文学の秘密の鍵のようなものにこころがふれたような錯覚を抱いたのは私が中学一年生のころで、六十年後の今も覚えている。

けさ立ちそめし秋風に、

「自然」のいろはかわりけり。

高根に蝉の声細く、

茂草（しげみ）に虫の歌悲し。

林には、

蝉のこゑさへうらぶれて、

野面には、

千草の花もうれひあり。

あはれ、あはれ、蝶一羽。

破れし花に眠れるよ。

こんな詩なら自分もつくりたいと、まがいものの詩をつくったこともあるが、残念ながら新体詩は流行遅れになり、私の感性は鈍くなってしまった。しかし、流行はつかのまの現象でも、この詩には不易を感じさせるのがあると今でも思う。

そこで、遅まきながら「恋愛は人世の秘鑰（ひやく）なり」という書き出しの『厭世詩家と女性』を読んでみた。「秘鑰」とは、秘密を解き明かす鍵のような意味。平成の高齢者にとっては秘鑰とはいえないが、明治の青年詩人には秘鑰だった、



厭世詩家と女性

映画文学人生論

「恋愛ありて後人世あり。恋愛を抽（ぬ）き去りたらむには人世何の色味かあらむ」と透谷はいう。彼は恋愛により靈感を得て、「楚囚の詩」や「蓬萊曲」を自費出版し、「人世に相渉るとは何の謂ぞ」や「内部生命論」を『文学界』に発表して、島崎藤村ら当時の文学青年に影響を与えた。

清新な近代文学をきり拓いた天才作家だが、透谷はわずか二十四歳五ヶ月の若さで生涯を終えている。やはり『文学界』の寄稿者だった女流作家の樋口一葉も二十四歳六ヶ月で逝去——明治二十年代は才子佳人薄命の時代だった。

一葉は肺結核による病死だが、透谷の場合は首吊り自殺。その結末に至る経過は透谷をモデルにした人物の登場する島崎藤村『春』で描かれているが、『厭世詩家と女性』を読むと、透谷自身もある程度、予感していたようだ。

厭世詩家は恋愛によって人世の秘鑰をつかむことはできても、持続しない。バイロンもシエレイもスウィフトも結婚生活で女性を幸せにすることはできなかつた。「嗚呼不幸なるは女性かな。厭世詩家の前に優美高妙を代表すると同時に醜穢なる俗界の通弁となりて其嘲罵する所となり、其冷遇する所となり、終生涙を飲んで、寝ねての夢、覚めての夢に、郎を思ひ郎を恨んで、遂に其愁殺するところとなるぞうたてけれ、うたてけれ」。

只だ此まゝに「寂」として、

花もろどもに滅（き）えばやな